

北信越地区小中学校のアダプテッド・スポーツ実施状況について

金田安正¹⁾ 若月博延²⁾ 山崎昌廣³⁾

Enforcement Situation of Adapted Sports in Elementary and Junior High Schools in the Hokushin-etsu District

Yasumasa KANEDA Hironobu WAKATSUKI Masahiro YAMASAKI

Abstract

We conducted a survey by mailing questionnaires to the nationwide elementary and junior high schools as subjects for the clarification of the present situation of teaching of physical education for children with disability registered there as well as our future subjects. Here we reported the survey result with subjects of five prefectures in the Hokushin-etsu District such as Nagano, Niigata, Toyama, Ishikawa, and Fukui mentioned below:

The following views commanded a majority in elementary and junior high schools with the registration of children with disability:

- * “Physical education is important” for children, effective for children with disability to understand “the relationships with the other children”, and for children without disability to “understand handicaps”.
- * Many teachers cited “children are getting to enjoy and like physical activities” as objectives of physical education, while a few cited “children are getting to improve motor skills” as the objective.
- * Seventy percent of elementary and junior high schools did let children with and without disability together participate in school events on sports.
- * Many teachers were looking forward to obtaining knowledge on sports for the disabled as well as joining training sessions on this subject.
- * Many teachers considered difficult to progress physical education for children with and without disability together smoothly in a regular class for the following reasons: children without disability were hardly satisfied with the lesson of physical education with children with disability; the lesson with children with disability should be a burden on children without disability and it is difficult to conduct team events of children with and without disability together.

Key words : physical education for children with disability, enforcement situation, Hokushin-etsu District

1 目的

文部科学省は21世紀の特殊教育のあり方として、各人の要求に合うような適切な教育支援計画がなされるべきだとしている。

最近、アダプテッド・スポーツ (adapted sport) という語が使われるようになっており、日本体育学会の分科会名ともなっている。これは身体障害、知的障害、身体能力、年齢などにとらわれず、ルールや用具を工夫してその人に適合させたスポーツを指しているが、まさに文部科学省の考え方と合致するものである。

アダプテッド・スポーツの発展には、学校体育におけるアダプテッド・スポーツ教育が重要であると考えられる。そこで、全国の小中学校における障害者体育の実態および問題点を明らかにすることを目的として、郵送によるアンケート調査を行なった。そのうち筆者らは、北信越5県（長野、新潟、富山、石川、福井）を対象として調査した。ここにその結果を報告する。

2 調査概要

1) 調査主体

独立行政法人日本学術振興会 平成18年度科学研究費補助金 基礎研究 (B)

研究課題名：「学校におけるアダプテッド・スポーツ教育の実施状況に関する調査研究」

研究代表者：山崎 昌廣（広島大学大学院総合科学研究科・教授）

2) 調査内容

小・中学校における障害のある子どもたちを対象として体育実施に関する現状および問題点

3) 調査対象

全国公立小学校約2,000校および中学校約1,000校のうち北信越5県（長野、新潟、富

山、石川、福井）の小学校400校、中学校180校

北信越5県では、それぞれ小学校80校（県庁所在市15校、その他の市50校、町村15校）、中学校36校（県庁所在市10校、その他の市20校、町村6校）

4) 調査期間

平成18年9月20日～平成18年10月20日

5) 調査方法

アンケートの郵送法

3 結果と考察

1) 回収率

小中学校とも4割前後の回収率だったが、新潟県だけは中学校23校（63.8%）と多く、逆に小学校は23校（28.7%）と少なかった。

2) 回答した教員の年齢

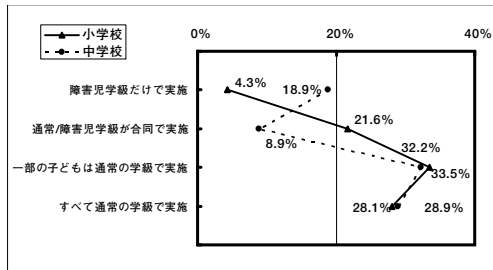
回答者の年齢構成は、小中学校とも、41～50歳がもっとも多く、次いで小学校では51～60歳、31～40歳の順で、中学校では逆に31歳～40歳、51～60歳の順であった。

3) 授業の実施形態

授業の実施形態を図1で示したが、小中学校とも同様の傾向を示し、6割以上の学校で、通常の学級に障害児が加わって体育の授業が行われている。

「通常学級と障害児学級が合同で実施している」のは、小学校では多いのに比べ、中学校では少ない。逆に、「障害児学級だけで実施している」のは、小学校では少ないのに比べ、中学校では多い。

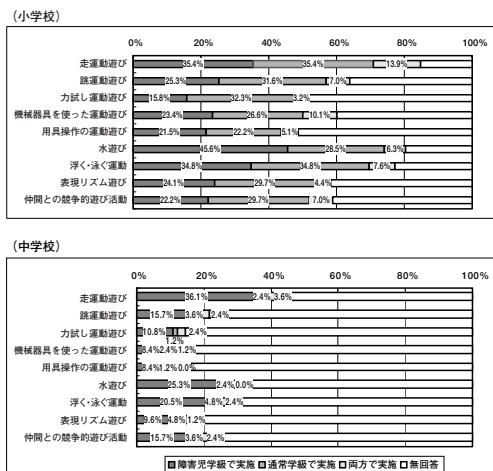
図1 授業の実態



4) 運動の実施

基本の運動を「障害児学級(特別支援学級)」で行なっているか、あるいは「通常学級」で行っているかについて尋ねた結果を図2で示した。行われている運動は、小学校では、「走運動遊び」がもっとも多く、次いで「水遊び」,「浮く・泳ぐ運動」,「跳運動遊び」である。そのほとんどは「障害児学級」で行われているのと「通常学級で行われている」のがほぼ同数だったが,「水遊び」だけは,「障害児学級で実施した」が多かった。中学校では,小学校同様「走運動遊び」が多く行われているが,活動のほとんどは,小学校とはまったく異なり「障害児学級」で実施されている。

図2 基本の運動の実施率

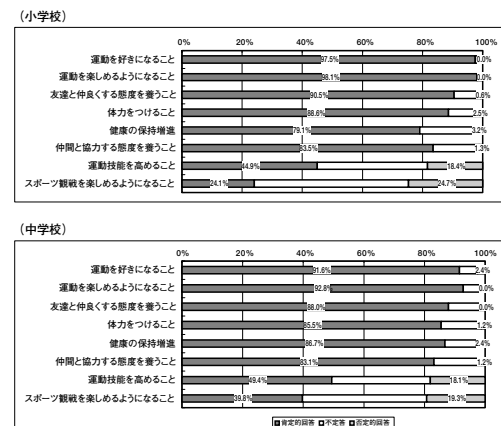


5) 体育授業の目標に対する意識

体育授業の目標の考え方を図3で示した。

「運動を好きになる」ことや「運動を楽しめるようになる」ことを多く取り上げている。また,「友達と仲良くする態度を養う」や「仲間と協力する態度を養う」などの人間関係の構築や,「健康や安全に配慮する態度を養う」,「健康の保持増進」,「体力をつける」などの健康づくり体力づくりに対しても高い割合で目標としている。逆に,「運動技能を高める」のほか,「スポーツ観戦を楽しめるようになる」などの特定の種目に長じさせようとするような考え方はそれほど多くなかった。

図3 目標に対する意識



6) 体育授業の運営面の考え方

体育授業の展開にあたっての考え方についての結果を図4で示した。「子どもたちにとって体育は重要である」がもっとも多かった。その他,「障害の状況」にあわせて,「ルールなどを工夫」したり,「種目を選択」したり,「用具などを工夫」したり,「評価法を工夫」したりと,障害の状況にあわせていろいろと工夫しながら取り組んでいる様子が知られた。

「チームで行う種目」については,小中学校とも半数以上が実施しづらく,また,「生徒の人数が多く,指導しづらい」とも考えている。

「教師の数」と「体育用具や教材」,「体育の授業でボランティアを導入したい」の項目

では、小学校と中学校の回答の割合が逆転していた。「教師の数」について、小学校では「十分ではない」が多く、中学校では「十分」との応えが多かった。また、「体育用具や教材」が、小学校では「不十分」との応えが多く、中学校では「十分揃っている」が多い。「ボランティアの導入を希望している」のは、小学校で多く、中学校では「希望していない」が多かった。これらの結果からは、小学校の方が中学校よりきめ細かに、積極的に取り組んでいる姿勢が窺われる。

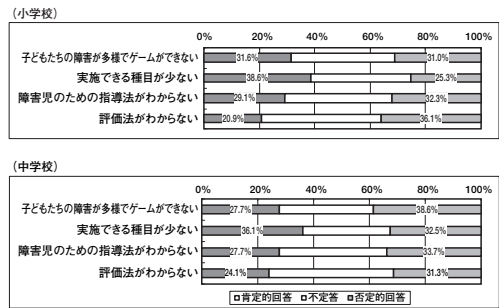
図4 運動面の考え方（Ⅰ）



「子どもたちの障害が多様でゲームができない」、「実施できる種目が少ない」、「障害児のための指導法がわからない」、「評価法がわからない」など、指導に困難を極めているのではないかと考えられる項目を図5に示した。小学校も中学校も「そう思う」と「そうは思わない」がそれぞれ20～30%であった。

障害児の小中学校時代、どのような体育の授業だったかを尋ねると、「同じ学校でも学年が変わると対応も変わったりして、要するに先生次第」との応えを聞くことが多い。まさにこの結果はこの話を裏づけるような内容で、積極的に取り組んでいる先生と指導に困難を感じている先生と同じくらいいることが知れた。

図5 運営面の考え方（Ⅱ）

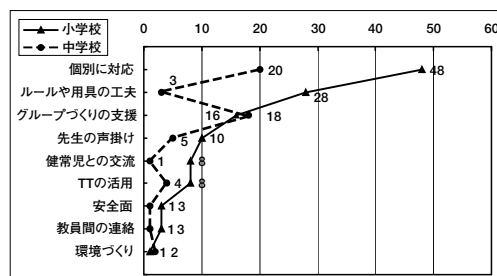


7) 工夫している点

障害者に対して体育やスポーツの指導を行う際、ルールや使用する器具を工夫したり、言葉かけや他の子どもたちとの組み合わせなどの指導法についても、いろいろと工夫しながら展開していく必要がある。工夫している点について記述してもらったが、項目分けをしたものを図6に示した。回答の中では、小中学校とも、「個別に対応している」がもっとも多かった。小学校では、次いで「ルールや用具の工夫」、「グループ作りの支援」、「先生の声掛け」、「健常児との交流」、「TT（チームティーチング）の活用」と続くが、中学校では個別の対応の次に「グループづくりの支援」が多かった。

小学校では2番目に多かった「ルールや用具の工夫」については中学校では多くなかった。4)「基本の運動の実施」の項で、中学校では、「障害児学級で実施することが多く、通常学級で実施することが少ないことを述べたが、ここでは、その影響が強く現われているものと考えられる。障害のある児童を健常児とともに体育をさせるには、いろいろな工夫をしなければならないが、障害児だけを分けて授業を行うのであれば、それほど工夫をする必要がないものと考えられる。

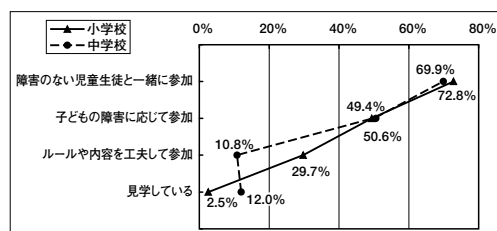
図6 工夫している点



8) スポーツに関する学校行事への参加の仕方

運動会や球技大会などの学校行事への参加についての結果を図7で示した。小中学校ともほぼ同様の傾向を示している。「障害のない児童生徒と一緒に参加」させているのが7割程度ある。参加のさせ方としては、約半数が「子どもの障害に応じて、できる範囲で参加」させている。それより積極的に「ルールや内容を工夫して」参加させているのは、小学校では約3割、中学校で1割である。この項目については先の項7)でもその傾向が知られたが、小学校の方が中学校の方より積極的に取り組んでいるものと考えられる。それはまた、「見学」させている結果にも現れており、小学校では4校(2.5%)にしか過ぎないのに比べ、中学校10校(12.0%)と、中学校が多いことからわかる。

図7 スポーツに関する学校行事への参加の仕方



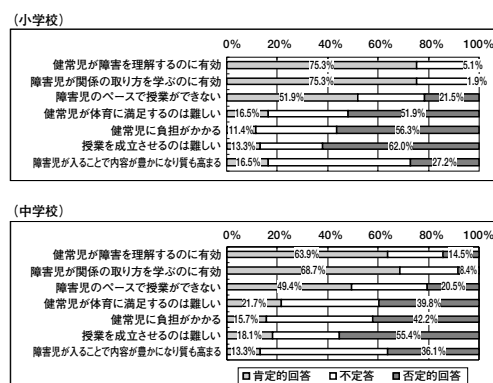
9) 通常学級での体育授業に対する意識

通常学校で健常児と障害児がともに体育を行うことについての先生方の考え方を図8に示した。小中学校とも高い割合で、「健常児が障害を理解するのに有効」「障害児が関係の取り方を学ぶのに有効」と考えている。

また、「授業を成立させるのが難しい」、「健常児に負担がかかる」、「健常児が体育に満足するのは難しい」などの授業の展開の困難さを尋ねた項目について、小学校では「あまりそうは思わない」、「全くそうは思わない」と考えているのが半数を超えていた。中学校では、それよりは低いとはいえ、それぞれが46校(55.4%)、35校(42.2%)、33校(39.8%)とかなり高い割合であった。しかし、逆に、これらの項目を「とてもそう思う」、「ややそう思う」と、小中学校とも10%台が応えている。また、中学校では、「障害児が入ることで内容が豊かになり質も高まる」の項目について、「まったくそうは思わない」、「あまりそうは思わない」を併せると30校(31.6%)とかなり高い割合で、否定的な考え方が示された。

なお、小学校で65.8%、中学校で71.1%が、「障害児のペースで授業ができない」と応えている。

図8 授業に対する意識

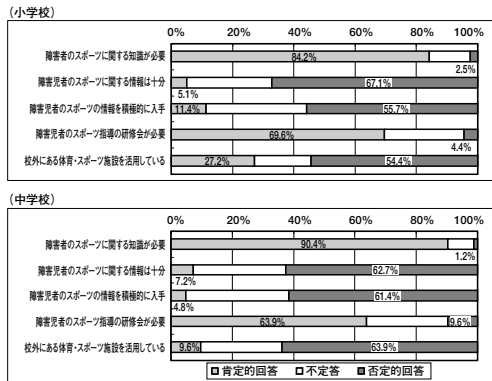


10) 障害児・者のスポーツについての考え方

障害児・者スポーツに関する先生方の考え方を図9に示した。この項目でも、小学校と中学校では同様の傾向を示した。「障害者のスポーツに関する知識」と「障害児・者のスポーツに関する研修会」の項目で、高い割合でその必要性を示した。また、「障害児者のスポーツに関する情報は十分」、「障害児者ス

ポーツに関する情報を積極的に入手している」、「校外にある体育・スポーツ施設を活用している」については、「そうは思わない」が逆に高い割合を示した。

図9 障害児・者スポーツについての考え方



11) 障害者スポーツについての意見

障害児者が健常児とともにスポーツを行うことについて、自由記述で意見を聞いたところ、内容的には、「積極的に取り組む考え方」をしているもの、「要望」を示したものの、そして「否定的な考え方」と大きく3つに分類することができた。

6)の項で、先生方の取り組み方に違いがあり、20～30%で相反する考え方があることを示したが、ここでもそれを裏づけるような結果がみられた。

4 まとめ

北信越5県の小学校158校、中学校82校からアンケート調査の回答を得たが、高い割合で示された考え方は、次のとおりである。

- ・健常児の中で障害児と一緒に「体育を行なうことは重要」であり、障害児が「他の子どもたちとの関係」を、また、健常児が「障害を理解」するのに有効である。
- ・体育授業の目標としては、「運動を好きになる」、「運動を楽しめるように」ことを多くあげている。また、「友だちと仲良くする態度を養う」、「仲間と協力する態度を養う」などの人間関係の構築や、「健康や安

全に配慮する態度を養う」、「健康の保持増進」、「体力をつける」などの健康づくり体力づくりに対しても高い割合で目標としている。逆に「スポーツ観戦を楽しめるようになる」や「運動技能を高める」と考えているのは少ない。

- ・授業の展開においては、「個別に対応」しているのがもっとも多く、次いで「ルールや用具の工夫」、「障害にあった種目の選択」、「グループ作りの支援」、「先生の声掛け」、「健常児との交流」、「TT（チームティーチング）の活用」などを行っている。
- ・スポーツに関する学校行事への参加については、「障害のない児童生徒と一緒に参加」させているのが7割である。参加のさせ方としては、約半数が「子どもの障害に応じて、できる範囲で参加」させている。特に小学校では、より積極的に「ルールや内容を工夫して」参加させている。
- ・「子どもたちの障害が多様でゲームができない」、「実施できる種目が少ない」、「障害児のための指導法がわからない」、「評価法がわからない」などの項目については、「そう思う」と「そうは思わない」がそれぞれ20～30%であったが、先生方の取り組み方にはいろいろと違いがある。
- ・「授業を成立させるのが難しい」、「健常児に負担がかかる」、「健常児が体育に満足するのは難しい」などの授業の展開の難しさを質したのに対して、小学校では半数以上、中学校では4割以上が、「そう思わない」と考えているが、積極的に授業を展開しようとしている様子が知られた。逆に、小中学校の10%が、「そう思う」と応えているが、困難を抱えていることが知られた。
- ・小中学校とも高い割合で、「障害児のペースで授業ができない」と応えているが、障害児に対し、より配慮した授業を展開したいのだが、健常児全体を満足させながら障害児に対応しなければならない困難さが示されていると考えられる。

- ・項目, 「障害児の体育を障害児学級だけで
対応や, 「教師の数」, 「体育用具や教材は
十分」, 「体育の授業でボランティアが必要」,
「ルールや用具の工夫」, 「スポーツ行事への
見学」などで, 小学校と中学校の対
応に違いがみられた。
- ・障害者スポーツに関する情報が少なく, 今
後, 障害者のスポーツに関する「知識を得
る」ことと「研修会の受講」を希望してい
るものが多い。

